

「いのちの始まりと死生観」報告

島蘭 進

二〇〇三年六月六日、七日の両日、東京大学文学部の一番大教室と教官談話室を会場として、本二十一世紀COE研究拠点形成プログラムおよび応用倫理プログラムの共同主催によるシンポジウム「死生学と応用倫理」の第一部「いのちの始まりと死生観」が行われた。

「応用倫理プログラム」は本COE「死生学の構築」の主要メンバーの一人である竹内整一教授が主査を務め、COE「死生学の構築」の採択に先だつて平成十四年度に発足したものであり、二つのプログラムは緊密な連携関係にある。今回のシンポジウム「死生学と応用倫理」はこの連携関係を明確に示すべく、双方のプログラムの重なり合う部分に焦点をあてて行われた。

シンポジウムの全体は第一部、第二部に分かれ、それぞれ「いのちの始まりと死生観」、「いのちの終わりと死生観」と題された。そして、第一部はオックスフォード大学の二人の生命倫理、医療倫理の研究者を招いての公開講演会（六月六日）と、内外の十一人の研究者を主役とする研究会（六月七日）とから構成されている。第二部「いのちの終わりと死生観」は、「新しい死のかたち・変わらない死のかたち」をめぐる公開シンポジウム（六月二十一日）であり、その成果はおつてブックレットの形で刊行される。

本号では、(一)シンポジウム全体の主旨文、(二)第一部の公開講演会の二人の講演者の講演原稿二篇（日本語訳）、(三)研究会の報告原稿五篇（または要約稿、または修正増補稿）、そして、(五)討議内容のまとめを掲載する。

第一部の公開講演会と研究会の日程と演者の概略は以下のとおりである。

六月六日、公開講演会（一番大教室、午後三時～六時）

講演

ジュリアン・サヴァレスキユ（医療倫理学、オックスフォード大学）「合理的道德、新しい遺伝学そして人格」
トニー・ホープ（生命倫理学、オックスフォード大学）「生命の始まりと非同一次性問題」

司会

赤林朗（医療倫理学、東京大学）

六月七日、研究会（教官談話室）

報告と討議（十時三十分～午後二時五十分）、コメントと総合討議（午後二時五十分～五時三十分）
報告者

出口顕（文化人類学、島根大学）

荻野美穂（女性学、大阪大学）

島蘭進（宗教学、東京大学）

八幡英幸（倫理学、熊本大学）

立岩真也（社会学、立命館大学）

コメントータ

清水哲郎（哲学、東北大学）

ヒレル・レヴィン（社会学、ボストン大学）

司会

ヘレン・ハーデカ（宗教学、ハーヴァード大学）

熊野純彦（倫理学、東京大学）

懇親会（山上会館、午後六時～八時三十分）

公開講演は英語によってなされたが、講演原稿とその日本語訳を収載したパンフレットを聴衆に配布してそれを参照しながら行われた。二百名近くの聴講者があり、終始熱心に聴講し、また講演後は活発な質疑応答が行われた。研究集会は会場が狭いので、参加者を百人強に限定して行われたが、各方面の専門家を中心に、長時間にわたり活発な討議が行われた。研究集会の報告者からは公開講演の際にも質問があり、ホープ、サヴァレスキユの両講演者も研究集会で積極的に発言したので、二日間通して参加した者にとつては、公開講演と研究集会は連続した一つのプログラムとなり、「いのちの始まりと死生観」というテーマについての、二日間の集中的かつ学際的な討議となった。

本シンポジウムの開催にあたっては、多くの方々から多大なご援助をいただいた。講演者、報告者、コメントータ、司会等の役割をお引き受けいただき、ご貢献下さった方々はもちろん、シンポジウムの準備の過程でご支援をいただいた関係者の方々、また、聴衆として、また招待討議者として参加し、討議を盛り上げて下さり、また熱心に耳を傾けて下さった方々に、この場を借りてあつくお礼を申し上げます。ホープ、サヴァレスキユ両教授の招聘にご尽力いただいた上廣倫理財団にも謝意を表したい。

このシンポジウムは懇親会でご挨拶をいただいた廣川信隆医学部長をはじめ、本学医学部の方々からのご支援に多くを負っている。講演・討議参加者のうち、ホープ、サヴァレスキユ、赤林の三教授は医学博士であり、第二部は医学部大講堂で行われた。このシンポジウムが東京大学における文学部と医学部の交流の歴史の上で大きな意義をもつ出来事ではなかったかということを書いて、この前文を結ぶ。

なお、シンポジウムに先立って配布された主旨説明の一文を、参考資料として掲載しておく。

二〇〇三年七月十一日